

版本百人一首の挿絵の研究 — 畳に着目して —

道給 彩乃

小倉百人一首(以下、百人一首)は、藤原定家が13世紀前半に100人の歌人の歌を1首ずつ選んだ秀歌撰である。その後、現代に至るまで広く享受されている。江戸時代、百人一首は人気を博し、百人一首絵が付されている版本が数多く出版された。絵入り版本百人一首には歌人が畳に座している歌仙絵が多く見受けられ、歌人が座している畳の縁には多様な模様が描かれている。しかし百人一首の版本の挿絵における畳の縁の描写を中心に言及した研究は、見受けられない。そこで本研究は、版本百人一首の挿絵における畳の縁の模様を比較、分析することによって畳の描写にどのような意味があるのかを明らかにする。

本研究には、綿抜研究室にある百人一首の歌仙絵が描かれている版本10冊を使用した。版本のデータを収集した後、分類を行う。まず、歌の意味を汲み取った絵、歌意図であるか否かで大きく分類した。その後、歌の意味に関係ない文様に関しては、纏縹縁、高麗縁、その他の3種類の分類を行う。歌意図に関しては、描かれているもので、動物、植物、風景の3種類に分類した。分類後、歌人の官位や歌の意味を含め多角的に比較、分析を行った。

10冊の版本の畳の描写を比較したところ、多くの歌人の畳が文様で描かれている版本や、1首ごとの歌の情景を細かに描写した版本があり、版本ごとの特徴が見られた。また、ほとんどの天皇には纏縹縁が用いられていた一方で、誤りも見受けられた。高麗縁は、版本によっては多用されているものもあり、官位とは対応していない例も多く見られた。これら纏縹縁や高麗縁描写の誤りは、畳に対する価値観の変化が多少なりとも関係していると考えられる。平安時代において、畳は天皇や公家を使用する座具や寝具であり、広さや厚さ、また縁の模様によって権力を示す道具であった。しかし、百人一首絵が付された版本が流行した江戸時代において、畳は一般庶民にも床材として浸透した。版本に歌仙絵を描いた絵師にとっても畳は床材であり、畳は権力の象徴という平安時代の価値観と相違が生まれていたと考えられる。

動物、植物に関する歌を詠んでいる歌人は、畳の縁にもそれらの対象が描かれている確率が高かった。歌意図の中では、風景が描かれているものが最も多かったが、それは明確な対象が詠まれておらず、心情を描写した歌であった際にも海や山、空といった風景が描きやすいことが要因であると考えられる。歌意図に関しては、より多様な版本ごとの違いを確認できた。これらの相違点は手本としている歌仙絵が異なる、手本が同じものであっても絵師の違いによって細かな点に特色が出たなどの可能性が考えられる。本研究では、10冊の版本の畳の描写の比較、考察を行った。しかし、纏縹縁や高麗縁描写の有無や版本の系統などまだ明らかになっていない点が多くある。そのため、今後の課題としてより多くの版本をあたって検討していくことが挙げられる。

(指導教員 綿抜豊昭)